

髓

—— 理のない理性 ——

ただの洋楽好き

目次

朝のホームルーム	2
1 時間目 読み物「二通の手紙」	6
道徳ノート1 規則と思いやり	22
2 時間目 読み物「ネット将棋」 一日目	24
道徳ノート2 勝負と誇り	48
ワークシート1	50
3 時間目 読み物「ネット将棋」 二日目	56
道徳ノート3 言葉と気持ち	86
ワークシート2	88
休み時間1 とある日の朝	94

朝のホームルーム

ガラツと音を立てて扉が開く。先生が教壇に立つと、それまで少しぎわついていた教室の空気がすっと澄んでいく。窓から差し込む温かな光は、生徒たちの真新しいノートを柔らかに照らしている。

「はい、じゃあちよつと早いけど席についてくれる?」

生徒たちの視線が、先生にまっすぐに集まる。

「これから道徳の授業が始まるわけやけど、その前に、このクラスの道徳の授業で大事にしてほしいルールのお話をしようと思う」

「みんな、道徳って一言で言うたら、何やと思う?」

突然の問いに、生徒たちは少し考え込むように首を傾げる。先生はその様子に優しく頷きながら、続けた。

「色んな答えがあると思うけど、道徳って一言で言うത്『思いやり』のことやと僕は思う。互いのことを認め合い、想像し合って、自分も周りも、みんなが気持ちよく毎日を過ごせるようにする。それが、この授業で一番大切にしたいことや。そのために、この授業には大事な大前提が二つある」

先生は指を二本立てて見せる。

「二つ目。人によって考え方は違うってこと。これから色んなテーマで話し合っていく中で、隣の席の子が自分とは違う意見を出してくれるかもしれない。それを『間違いや』って否定するんやなくて、『そんな考え方もあるんやな』っていうふうに思ってほしいねん。『自分とは違う』ってのを認めることが、思いやりの第一歩やと思う」

先生の話に生徒たちは静かに頷く。

「ほんで二つ目。道徳に『模範解答』はないってこと。たった一つの絶対的な答えなんて、道徳にはないんや。たとえば、満員電車でお年寄りが乗ってきたら『席を譲ったほうが良さそう』って思ふかもしれへん。『でも、ほんまにその人は譲られて嬉しいんやろうか』とか『満員電車で席を立てて譲るのは、周りに迷惑をかけへんやろうか』とか……そういつたことを考えたら、『譲らへん』っていう判

断が最適解になることもあるのが分かると思う。みんなには、この授業でいろんな考えを深掘りして、場面に合わせた『最適解』を見つける力をつけてほしい」先生は教室全体をゆっくりと見渡し、最後ににこっと笑いかけた。

「だから、考え方の違いを恐れんと、安心して自分の言葉で話してな。みんなの意見を聞けるの、楽しみにしとるで」

優しい沈黙の中に、授業開始を告げるチャイムが響き渡る。

1時間目 読み物 「二通の手紙」

「はい、じゃあ道徳の授業を始めていきます。お願いします」

先生の言葉に生徒たちは立ち上がり、頭を下げる。

「お願いします」

凜とした、それでいて温かな声が教室に満ちた。

「今日は『二通の手紙』っていう読み物でいろいろ考えていこう」

先生はそう言うと、教科書を開くよう促した。

「教科書の140ページ開いてくれる？　まずは僕が読んでいくから、カギになりそう
なところに印をつけたりしながら確認してな。『二通の手紙』」

先生の落ち着いた声が、物語を紡ぎ始める。規則、優しさ、そして二通の手紙を
めぐる、ある動物園の入園係の話だ。

物語が終盤に差し掛かったとき、一番最初に、小さく息をのんだのは陽奈だった。明るい彼女の表情が曇り、隣の席の美緒の袖をくいと引く。

「ねえ……元さん、かわいいそうじゃない……？」

ささやかれた美緒は、悲しそうな顔でこくと頷いた。

「うん……なんだか、切ないね……」

一方、物静かな大輝は、黙って教科書の挿絵をじっと見つめている。彼は指でそっと、感謝の手紙をなぞった。そして、少し離れた席では、拓也が「うーん……」と考え込むように腕を組んでいる。その表情は、納得のいかないような、複雑な色を浮かべていた。

先生が教科書を置き、ゆっくりと生徒たちを見渡した。

「そうやなあ、まずはお話の感想を聞いてみようかな。誰でも思ったこと自由に言ってみて」

その言葉に、生徒たちは少し顔を見合わせ、誰が話すかを探り合っている。静寂を破って、ぱっと手を挙げたのは陽奈だった。

「はい！ ああ、なんか、元さんが可哀想だなんて思いました。だって、困ってる姉弟を助けてあげただけなのに、停職になっちゃうなんてひどいと思います。お

母さん、あんなに感謝してたのに……」

隣の美緒が優しく頷きながら、それに続ける。

「私も……そう思う。お母さんからのお手紙はすごく温かいのに、もう一通の『懲戒処分』っていう手紙はすごく冷たくて……。二つが並んでいるのを想像したら、なんだか胸が苦しくなりました」

腕を組んでいた拓也が、少し違う角度から口を開いた。

「うーん……。でも、元さんが園の規則を破ったのは事実だよな。もし、あの子たちが池で事故にでも遭ってたら、もっと大変なことになってたわけで……。だから、動物園が処分するっていう判断も、分からなくはないかなって。……でも、そう思うと、感謝の手紙があるから、すごい複雑な気持ちになる……」

拓也の現実的な言葉に、教室が少し静かになる。みんながその言葉の意味を考えていると、今まで黙って話を聞いていた大輝が、ぽつりとつぶやいた。

「……元さん、最後は『晴れ晴れとした顔』だったんだ……。なんで、あんな顔になれたんだろうって……。それが一番気になりました」

「おっしや、みんな発表ありがとうな。うん、なんか切なくなるよな。あとでみんなでじっくり考えてみよか」

先生は一人ひとりの意見を受け止め、優しく微笑んだ。

「じゃあ、前から一個ずつ見ていってみよう。……ここでは『規則』ってのがポイントになってきそうやな。ほんで、この二人の考え方、どっちが正しいってわけではない。どっちも信念に基づく行動やから。でもここでは、その行動の『善悪』ではなく、『規則に従うこと』に焦点を当ててお話を解きほぐしていこう」

先生がこの時間のテーマを示すと、生徒たちの間にわずかな変化が起きた。

「どっちが正しいとかじゃないんだ……」

陽奈が呟く。拓也はそれまで組んでいた腕をほどき、少し身を乗り出したように見える。「規則」という、より具体的なテーマに興味を引かれたようだ。

「回想の場面に行ってみよう。……この場面、行動としては『入れてあげる』『帰す』の二通りある。自分ならどっちの行動をとるか、考えを言ってみてか」

「自分ならどうするか」という問いかけに、教室は自分事として考えるための静けさに包まれる。

一番に「はい！」と手を挙げたのは、やはり陽奈だった。

「私は、絶対に入れてあげます！　だって、弟の誕生日なんでしょ？　それなのに泣きそうな顔してたら、可哀想すぎるもん。規則も大事かもしれないけど、それ

で子どもの誕生日を台無しにするのは、なんか違う気がする！」

美緒も、陽奈に同意するように、でも静かに話し始める。

「私も、入れてあげると思います……。女の子が、入園料をぎゅっと握りしめてたって書いてあったし……。その子の『弟に見せてあげたい』っていう優しい気持ちを考えたら、規則だからって断るのは、私にはできないかも……」

二人が「入れてあげる」という意見を述べた後、拓也が、少し難しい顔をしながら口を開いた。

「俺は……規則通り、帰すと思う。……気持ちには分かるけど、結果的に元さんは停職処分になってる。それに、子どもたちも園の中で迷子になって、大騒ぎになったわけだし。その場の優しさが、後でもっと大きな迷惑とか、もしかしたら事故に繋がったかもしれない。そう考えると、やっぱり決められた規則には従うべきなんじゃないかな」

拓也の意見に、陽奈や美緒は少し複雑な表情をしている。最後に、ずっと黙って考えていた大輝が、ゆっくりと顔を上げた。

「……どっちが正しいかは、分からないです。でも、元さんは何日もあの子たちの様子を見てた。ただの『お客さん』じゃなかったんだと思う。だから、『規則』

よりも目の前の二人の気持ちを優先した……。自分だったら、その場でどっちの判断ができるか……。自信がないです」

「みんなそれぞれ良い意見言うてくれたな。特に大輝くん。『その場で判断できる自信がない』ってのも立派な意見や。難しいもんな」

先生は、大輝の意見を優しく包み込んだ。さらに、佐々木さんの立場が過去と現在で変わったことに触れ、考えは変わっていくものだと言加えた。その指摘に、拓也がハッとした表情で口を開く。

「ああ、なるほど……。佐々木さんは、元さんの『事件』を全部見てたから……。優しい気持ちで規則を破った結果、元さんが停職になって、大騒ぎになったのを知ってる。だから、今の佐々木さんは、数年前とは違って『帰す』立場になったってことか……」

拓也の言葉に、陽奈や美緒も「そっか……」と、佐々木さんへの印象が変わり始めていたようだ。

「そうやな。佐々木さんの立場が変わったのは『事件』に遭遇したからや。『事件』の始まりは、元さんが規則を破ったところやったな。ほなら、元さんが破った規則ってなんやったっけ？」

先生が尋ねると、拓也がすぐに手を挙げた。

「はい。二つあると思います。一つは『入園時間が過ぎていたこと』。もう一つは『小学生以下の子供は、保護者同伴でなければならないこと』です」

「そうやな、元さん、一つどころか二つも規則破ってもうたんや。……これによって『失踪』っていう事件が起こったわけで、事故につながる可能性もあったんやな。どんな事故が想定できる？」

先生が尋ねると、教室の空気が少し引き締まった。

「はい。……もし、池に落ちておぼれていたら、と一番に思いました。閉園後で誰もいないから、誰も助けられない状況だったと思います」

拓也の言葉に、陽奈も顔をこわばらせて続ける。

「危ない動物の檻に近づいちゃって、もし手の中に入れて噛まれたりしたら……とか！ 暗くてよく見えなかったりしたら、危ない！」

美緒は、二人の身体的な危険とは少し違う視点から、おびえるように言った。

「それに、どんどん暗くなって帰り道も分からなくな……見つからなかったら、二人だけで夜を過ごすことになったかもしれないって思うと……すごく怖かったんじゃないかなって……」

「そうやな、考えれば考えるほど怖くなってくるな」

次々と浮かび上がる可能性に、生徒たちは皆、こわばった表情で深く頷いている。教室全体が、「規則」とは、ただ人を締め出す冷たいものではなく、皆を守るためにあるのかもしれない、という空気に包まれ始めた。

「じゃあ、言語化してみよう。……『規則ってなんのためにあるんだろうか』」

授業の核心に迫る問いに、最初に手を挙げたのは、拓也だった。

「はい。……さっきみんなで考えたみたいなの、危ない事故が起きないようにするため、だと思います。利用する人みんなが安全に過ごせるように、一番悪い結果を避けるためにあるのが、規則なんだと思います」

続いて、美緒が静かに言葉を添える。

「私も、拓也くんと似てます。みんなが悲しい気持ちや怖い思いをしないで、安心して楽しく過ごせるように……。そのためにあるのかなって思いました」

最後に、一番気持ちの変化が大きかった陽奈が、自分の発見を確かめるように言った。

「……うん。私もそう思う。最初は、ただ厳しいだけって思ったけど……そうじゃなくて、みんなをちゃんと守るためにあるんだなって……。だから、規則を守る

ことって、本当は……優しいこと、なのかなって……思いました」

「みんな良い気付きや。ほなら、視点を変えてみよう。『規則は絶対に守らなければならないものか』」

さっきの結論を揺さぶるような問いに、教室は再び深い思考の沈黙に包まれた。

「はい、僕は絶対だと思います」

一貫して規則の重要性を説いてきた拓也が、きっぱりと言った。

「もし『この場合は守らなくてもいい』っていう例外を一度でも認めたら、規則はどんどん意味がなくなっていくと思うから。みんなを平等に、安全に守るためには、誰にとっても絶対であるべきだと思います」

その明確な意見に対し、陽奈はとても困った顔で首をひねる。

「ええー……難しい……。さっき規則を守るのが優しさだって思ったけど……。でも、元さんが規則を破ったのも、あの子たちにとっては優しさだったし……。うーん……。『絶対』って言われると……。時と場合による、のかなあ……。？ わからないです……」

陽奈の葛藤を引き継ぐように、美緒が言葉を探しながら話す。

「基本的には守るべきだと思います。でも……。元さんは、あの子たちの事情を

知ってたから、規則よりも気持ちを優先したんだと思うんです。規則だけでは判断できない、その人の心を考えなきゃいけないときも、もしかしたらあるのかなって……」

最後に、ずっと天井のあたりを見て考えていた大輝が、静かに、でもはっきりとした口調で言った。

「……規則は、たぶん『みんな』のためにあって、元さんの優しさは、目の前の『二人』のためにあったんだと思います。……元さんは、『みんな』のための規則を破って、『二人』を選んだ。そして、その結果から逃げずに、全部自分で引き受けた……。だから……守らなくてもいいときもあるのかもしれないけど、それには、元さんみたいな『覚悟』が必要なんじゃないかと思います」

「みんなそれぞれ違うけど全部良い考えや。これまで僕は『AかBか』みたいな問いかけをしてたけど『答え』はないねん。同じく『絶対』もないんや。大輝くんは『自信がない』『覚悟が必要』みたいな第三の案を発表してくれた。これもめちゃくちゃ素晴らしい答えなんや。AでもBでもないCが答えになるときもある。これが道徳や。陽奈さんや美緒さんの『時と場合による』っていう考えも大事やな」

先生が議論を優しくまとめると、生徒たちは安堵と納得が入り混じったような、穏やかな表情になる。

「最後、『罰』について考えて終わろうか。元さんは『懲戒処分』を受けた。これって一種の『罰』やんな。『罰』ってなんのためにあるんやろうか」

拓也が答える。

「規則を『ただの言葉』で終わらせないため、だと思います。もし規則を破っても罰がなかったら、誰も真剣に守らなくなる。だから、『これを破ったらこうなる』という結果を示すことで、社会の秩序を守るためにあるんだと思います」

陽奈がそれに続く。

「うーん……自分がやったことが、良くないことだったんだって、ちゃんと考えられるようにするため……かな？」

美緒も、公平さや、間違いを示す意味があるのではないかと意見を述べた。そして大輝が、自らの言葉で締めくくった。

「……元さんは、罰を受けることも覚悟の一部だったんだと思います。だから、罰は……自分がした選択の『責任』を、ちゃんと形として引き受けるためにあるんじゃないか、と思いました」

「ありがとう。みんなしっかり考えて言葉にしてくれたな」

先生は満足そうに頷き、自身の考えを静かに語り始めた。

「僕は『罰』は『許し』への準備やと考えてる。許すために罰する。罰することで機会を与えてる。そう思うな」

その言葉に、生徒たちはハツとして顔を上げた。大輝は目を見開き、先生の言葉を深く味わうように聞いている。「責任」の先に「許し」があるという考えが、彼の中で大きな意味を持ったようだ。

先生が授業のまとめを黒板に書くように一つずつ読み上げ、感想を書くよう指示すると、教室にはカリカリという鉛筆の音だけが響いた。

授業の終わりを誰もが意識したその時、先生がふいに言った。

「よっしゃみんな書けたみたいやな。授業時間が10分くらい残ったから、最後に追加で訊くわな。お母さんからの手紙の内容について、みんなどう思う？」

生徒たちは追加の問いに少し驚きながらも、すぐに思考の世界に戻っていく。

「はい……。すごく切ない手紙だなんて思いました」

一番に口を開いたのは美緒だった。

続いて陽奈が、少し興奮したように付け加える。

「私は、この手紙を読んだら、やっぱり元さんがしたことは間違ってたんだって思いました！こんなに喜んでもらえてるのに、どうして罰を受けなきゃいけないんだろうって、もっと分からなくなりました」

二人の意見を聞いていた拓也が冷静に分析し、最後に大輝が「『あの子たちの夢を大切に思ってください』っていう言葉が、一番心に残りました」と、一つの言葉を拾い上げた。

生徒たちの共感的な意見が出揃ったところで、先生が静かに、しかし鋭い一石を投じた。

「だいぶ意地悪に思われるかもしれへんけど、僕的には『なんや、この文章』って思った」

その言葉に、教室の空気が一変した。陽奈と美緒は、戸惑いを隠せないでいる。

「もちろん、謝罪と感謝を入れてる点では十分な手紙かもしれへん。でもこの手紙、読んだときに『温かい家庭像』が強く印象に残らへんやろか？『動物園での迷惑への謝罪』が『楽しいそんな家庭での様子』にかき消されてる感じ。……もっと言うと、僕には『言い訳と感動』の手紙にすら見えてしまう。これって、もうちょっと伝え方が工夫できるんじゃないかな」

先生の示したこの新しい視点に最初に食いついたのは拓也だった。

「なるほど……。『温かい家庭』を強調することで、元さんがしたことの『正当性』をアピールしてる、みたいなの……。言われてみれば、確かにそういう読み方もできますね……」

しかし、大輝は少し違う考えを巡らせていたようだ。

「……僕は、意地悪だとは思いませんでした。お母さんにとっては、謝らなきゃいけないっていう気持ちよりも、感謝を伝えたいっていう気持ちのほうが、ずっと大きかったんだと思います。……だから、自然と感謝の言葉のほうが多くなっただけじゃないかなって……」

生徒たちがそれぞれの考えを巡らせる中、先生は教科書を手に取り、手紙の最後の部分を少し変えて読んでみせた。

『……大変なご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございませんでした。また、かけがえない思い出を作っていただき、本当にありがとうございました』……どうやらか。最後の文をいじっただけなんやけど、印象違ってこうへんかな?」

生徒たちは「ああ……」と、感嘆とも納得ともつかない声を漏らした。たった一行で、手紙の空気ががらりと変わったのを感じ取っている。

「わ、全然違います！『ごめんなさい！』と『ありがとう！』がちゃんと分かれるから、すぐく分かりやすい！」

陽奈が目を丸くして言った。拓也も、その違いを分析的に指摘する。

「最後の最後に、もう一度はつきりと謝罪の言葉で締めることで、手紙全体の印象が引き締まりました。これなら、誰が読んでも言い訳だとは思われにくいですね」

そして最後に、大輝がこの変化の本質を静かに語った。

「……前の手紙は、元さんの心だけに向けた、個人的な手紙だったんだと思います。先生が直したこっちの手紙は、元さんだけでなく、動物園っていう『社会』にも向けた、公的な手紙になってる感じがします。……個人の気持ちと、社会的な責任の、両方のバランスが取れてる。……すごいと思いました」

「今日やったのは『規則と罰』についてやった。でも最後にやった『たった一文での印象の変化』についても頭の片隅に入れておいて、『伝えたいことを正しく伝える』ってのも道徳において必要になってくるからな」

先生そのメッセージに、生徒たちは深く頷く。

「よし、ちょうど時間やな。道徳の授業を終わります。ありがとうございました」

先生の挨拶に陽奈がはっとしたように顔を上げ、クラスの代表のように声を張った。

「起立！」

その声で、生徒たちが一斉に立ち上がる。そして、先生に向かって、深く、心のこもったお辞儀をした。

「ありがとうございます！」

顔を上げた生徒たちの表情は、50分前とは比べ物にならないほど、深く、そして晴れやかだった。

授業終了を告げるチャイムが静かに響いた。

道徳ノート1 規則と思いやり

規則は何のためにあるのか？

- ・みんなが安心して過ごすため
- ・みんなを守るため
- ・秩序を生み、守るため

規則は絶対か？

- ・絶対。例外を認めてしまうと規則の意味がなくなってしまう。
- ・絶対ではない。場合による。
- ・破るには「覚悟」が必要。

罰は何のためにあるのか？

- ・言葉で終わらせず、社会の秩序を守るため
- ・自分の行動を反省するため
- ・規則を守っている人が不公平さを感じないように

- ・「責任」を形として引き受けるため
- ・許しへの準備。機会を与えるため

この時間のまとめ

- ・規則にはそれなりの理由がある。
- ・人の考えは変わりゆくものである。
- ・判断や行動には責任が伴う。
- ・たった一文、たった一文字変えるだけで、伝わる印象は大きく変わる。

内容項目

- (1) 自主、自律、自由と責任
- (10) 遵法精神、公德心
- (6) 思いやり、感謝
- (9) 相互理解、寛容
- (11) 公正、公平、社会正義

2時間目 読み物「ネット将棋」一日目

生徒会での活動のため初回の授業を欠席した海翔が、わくわくした様子で陽奈に尋ねる。

「前回の道徳、どんなことしたん？」

「『二通の手紙』っていうお話で、規則を守ることについて考えたよ。いろんな意見が出ただけど、先生はどの意見も大事にしてくれて、自分の意見が発表しやすかった！」

陽奈の言葉に美緒が静かに頷く。それを横で聞いていた竜二が鼻で笑う。

「どうせ、いつも一緒だろ。みんな綺麗事ばっか言いやがるんだ。道徳の授業なんて退屈だから、前も保健室でサボってやったんだよ」

「先生の授業、退屈じゃなかったけどな……」

大輝が呟くように漏らしたその言葉は、海翔の期待を膨らませた。

「おはよう！」

挨拶しながら先生が入ってくる。前回揃わなかった生徒たちが揃っているのを確認して、先生は嬉しそうに話す。

「今日はみんな揃ってるな。前よりも多くの意見が聞けそうや。そうそう、せっかく揃ったし、僕のクラスでの道徳のルール、もう一回話しくわな」

先生は、道徳とは何か、そして土台となる二つの大前提が何か、生徒たちと確認した。

「そうや、咲さん。虹の端っこ探して学校サボってまで探検するのやめてな。この前、何の連絡もなかったの心配したで。お家の人は『あの子のことだから、どこか探検してるんじゃないかな』って言うてはったけど」

先生の呆れたような、でもどこか面白がっているような注意に、咲は「えへへ」と笑った。悪びれている様子はないが、教室の空気は和む。

ほのぼのとした空気の中、授業開始のチャイムが鳴る。

「ほなやっていこか。道徳の授業を始めていきます。お願いします」

先生の挨拶に生徒たちは立ち上がり、声を揃える。

「お願いします」

「ほんなら今日は、28ページ開いて。『ネット将棋』ってお話使って考えて行こ」

先生の言葉で、生徒たちは一斉に教科書を開く。ガサガサとページのめくれる音が教室に響いた。拓也や海翔は、すぐにページを開いて先生の方をまっすぐ見ている。陽奈の隣で、咲が「あ、ネット将棋だ。私、どうぶつタワーバトルならやったことあるよ」と小さくささやき、陽奈が「しーっ」と人差し指を口に当てた。竜二は、面倒くさそうに本を開くと、机に肘をついてつまらなそうな顔をしている。大輝と美緒は、静かに教科書のタイトルを見つめていた。「はは、どうぶつタワーバトルか。あれおもしろいよね」

先生は咲のささやきに気づいて、小さく笑った。顔に優しい微笑みをたたえながら、チョークを手に取り授業を進める。

「よし、今日やっていくお話はちょっと登場人物多いから、名前の出てくる人たちを黒板に簡単にまとめとくね」

先生が物語を読み始めると、教室の空気は静かな集中に満たされた。主人公が敏和との対局で時間稼ぎをする場面では、竜二の口元に、少しだけ「分かてるぜ」と言いたげな笑みが浮かぶ。主人公がネット将棋で一方的に通信を切断する場面で

は、彼は小さく頷いた。一方、明子のソフトボールの話になると、陽奈や美緒は「あーあ……」というように、少し悲しそうな顔で聞き入っている。敏和が『負けました』って言うことで、力が伸びていく』と語る場面では、海翔や拓也が深く頷き、大輝は何かを考えるように、じっと自分の指先を見つめていた。

範読が終わり、先生が問いかける。

「ほな、お話読んだ感想を聞いてみようか。思ったこと自由に言っていってみて」
物語の余韻が残った、少し重い沈黙が流れる。最初に咲が手を挙げた。

「はい！ あの、わたし、どうぶつタワーバトルをネットでやったとき、相手が変な形のゾウを置いてきて絶対負けてしまうって思ったんですけど、そしたら急にラッコが一番上から降ってきて、奇跡的にバランスが取れて勝てたんです。それって将棋で言う『奇跡の一手』みたいな感じなのかなって思いました！」
すると、それを聞いて鼻で笑うように、竜二が口を挟んだ。

「てか、この話の主人公、別に普通じゃね？ 負けそうになったら時間稼ぎするとか、ネットでムカついたら通信切るとか、当たり前だろ。いちいち『負けました』とか言って頭下げるほうがダセェわ。そんなんで強くなるとか、ただの綺麗事。ウケる」

竜二の言葉に、陽奈がカッとなって反論する。

「え、そんなことないよ！ 私は、ソフトボールの明子さんの話が、すごく可哀想だなんて思った……。最後のバッターになっちゃって、悔しくて挨拶もできなくなっちゃう気持ち、分かるもん……。それに、敏和くんは全然ダサくない！ すごく大人だなんて思った！」

空気が少しピリついたところで、海翔がなだめるように話し始めた。

「竜二の言うみたいに、主人公の気持ちも分からんでもないけどな。誰だって負けるのは恥ずかしいし、逃げたくなる。でも、敏和みたいに、その負けから何かを学ぼうとする姿勢も確かにある。その『逃げる弱さ』と『向き合う強さ』の両方が描かれているのが、この話のポイントなんじゃないかな」

拓也、美緒、大輝は、まだ発言せず、三者三様の意見を静かに聞いている。

先生は頷きながら、生徒たちの意見を受け止める。

「うんうん。勝ちたいって気持ちも分かるし、悔しくて挨拶できなくなるのも分かるわ。だって、誰も負けたくて対戦なんてせえへんもんな」

先生その言葉に、少しピリついてた教室の空気が、ふっと和らいだ。挑発的だった竜二が、少し驚いたように先生の顔を見て、「だろ？」とでも言うように、

強く一度頷く。自分の気持ちを分かってくれた、と感じたようだ。他の生徒たちも、静かに頷く。クラス全員の気持ちが「負けるのは悔しい。だから勝ちたい」という点で一つになった。

「さて、このお話は『勝負』を軸に展開してたな。まずは『勝負』についていろいろ考えてみよか。みんなは勝負するの好き？」

先生の問いかけに陽奈が元氣よく答える。

「はい！ 好きです！ 試合とか、勝ったらめっちゃ嬉しいし、みんなで『やったー！』ってなるのが楽しいから！」

竜二が続く。

「勝つのは好きだな。相手をボコボコにして、どっちが上か思い知らせるのは気分いい。負ける勝負は時間の無駄だからやんねーけど」

拓也は冷静に答えた。

「勝つために作戦を考えたり、練習したりするのは好きです。自分の力がどれくらいか試せるので。でも、ただ運だけで決まるような勝負はあまり好きじゃないです」

海翔が笑顔で言う。

「俺も好きやで。本気でやり合うからこそ、終わった後に相手と仲良くなれたりするしな。お互い、ちょっと成長できる気がするから」

美緒は少し申し訳なさそうに言った。

「私は……あんまり好きじゃないです……。どちらかが勝って、どちらかが負けるっていうのが、なんだか悲しい気持ちになるので……。みんなで何かを作るほうが好きです」

咲が楽しそうに話す。

「好きです！ どうぶつタワーバトルで、誰も思いつかないような変な動物の積み方ができてタワーがすごく芸術的になったときは、勝つと同じくらいいいなっと思っています！」

少し間を置いて、大輝が静かに言った。

「……あまり、考えたことないです。人と勝負するより、昨日できなかったことが、今日できるようになることのほうが、気になるので……」

先生はみんなの意見をまとめる。

「なるほどな。みんな考えは違ってるけど、『勝つ』とか『成長』っていうプラス面が大きそうやな。ほなら、負けたらどういう気持ちになる？ これは意見いろいろ

ろ出てきそうやな」

新たな問いかけに、竜二が吐き捨てるように答えた。

「は？ ム力つくだけだろ。時間の無駄だったって思うし、相手がズルしたんじゃねえかって勘繰るわ。気に食わねえから、もう二度とそいつとはやんねえ」
陽奈が悔しそうに言う。

「すっごく悔しいです！ 『めっちゃ練習したのにー！』ってなるし、自分のせいで負けちゃったら、チームのみんなに申し訳なくて、泣きそうになります」
拓也と美緒もそれに続く。

「もちろん悔しいですけど、それよりも『なんで負けたんだろう』って原因を分析します。作戦が悪かったのか、練習が足りなかったのか……。そこが分からないと、次に勝てないので」

「やっぱり、悲しいです……。自分の力が足りなかったんだなって落ち込むし、相手にも、もっと良い勝負ができなくて申し訳ない気持ちになります……」
海翔は笑いながら話す。

「悔しいけど、半分は『やるな、相手』って感心するかな。完敗やったら、むしろスッキリするかも。『次は絶対勝ったる』って次の目標ができるから、それはそ

れで燃えるで」

大輝が静かに呟く。

「……腹は、立ちません。悔しい、というより……。できなかった自分に、がっかりします」

みんなの意見を聞いた後、咲はあっけらかんと言った。

「負けちゃっても、あんまり気にならないです！ それよりも、さっきまで作ってたヘンテコな動物タワーが、ガラガラって崩れちゃうほうが『あー！』ってなります。でも、また最初から作れるから、それはそれで楽しいです！」

先生は一度、生徒たちを見渡した。

「『ムカつく』とか『悔しい』、『悲しい』、『申し訳なくなる』っていうマイナス面と、『次へのエネルギー』っていうプラス面がありそうやな。咲さんみたいに『あんまり気にならない』って人もいていいかもね。いま『プラス面』『マイナス面』って言うんだけど『良い面』『悪い面』ってわけじゃないからな。決してその感情が悪いわけではない。でも、陽奈さんとか美緒さんの言ってくれた『申し訳ない』って気持ちは、僕はもつ必要ないと思うよ。勝負なんて全力でやってたらそれでいいんやから。『手抜き』と『実力不足』は違うもんね」

陽奈と美緒は、ハッとした顔でお互いを見つめた。陽奈が戸惑いながらも口を開く。

「え……そうなんですか？ でも、自分のせいで負けたら、やっぱり『ごめん！』って思っちゃいます……。『手抜き』と『実力不足』は違う……。そっか……」

美緒は少し救われたように、ほっとした表情を浮かべた。

「『申し訳ない』って、思わなくていい……。そうか……。一生懸命やった結果なら、胸を張っていいってことなのかな……。なんだか、少しだけ気持ち楽になりました」

その二人をフォローするように、海翔が力強く言う。

「先生の言う通りやで。お前らが全力でやって負けたなら、チームの誰も責めへんよ。むしろ『次がんばろうぜ』ってなるだけや。謝るより『悔しい！』って言うてくれるほうが、周りもスツキリすると思うで」

拓也も、論理的に同意する。

「僕もそう思います。『手抜き』はプロセスの問題で、『実力不足』は現時点での結果の問題です。負けたときに反省すべきなのはプロセスであって、全力を出した結果について謝罪する必要はない。合理的だと思います」

竜二は、腕を組んだまま、ふんと鼻を鳴らした。

『「実力不足」なら、ただ弱いつてただけだろ。謝る必要はねえ。次に勝てばいいだけだ。……まあ、俺は負けねえけど」

先生は話題を少し戻した。

「勝ち負けについて考えたけど、そもそもみんなが考える『勝負の楽しさ』って何やろう。これでも思ったこと自由に言ってみて。美緒さんとかは『勝負が好きじゃない』って言うってくれてたけど、もし何か『こういうところは楽しいかも』みたいなのが思いつけば言ってみてか」

陽奈が目を輝かせて答える。

「やっぱり、勝った瞬間です！ 特に、ギリギリの試合で最後に逆転したときとかは、もう最高！ みんなで抱き合って喜ぶのが、一番楽しいです！」

竜二が不敵な笑みを浮かべて言う。

「相手が『こいつ、強え……』って絶望した顔すんのをるのが面白い。自分の思い通りに相手をコントロールして、完膚なきまでに叩きのめす。それが一番の快感だろ」

拓也は少し得意げに話す。

「自分の立てた作戦が、相手にピタツとはまった時が一番楽しいですね。『こう動けば、相手はこう来るはずだ』って読んで、その通りになった瞬間は、パズルが解けたみたいでスッキリします」

海翔は爽やかに語る。

「本気の相手とやってるとき、『こいつ、やるな!』ってお互いに思える瞬間かな。

勝ち負けも大事やけど、その一瞬一瞬の駆け引きとか、終わった後に『いい勝負やったな』って言い合える関係がええなあって思うわ」

美緒が言葉を探しながら、ゆっくりと話す。

「えっと……。勝負そのものは、やっぱり苦手なんですけど……。でも、もしチームで試合に出るなら、試合までの間、みんなで励まし合ったり、一緒に練習したりするのは……。楽しい、かも、しません」

咲は身振りを交えて楽しそうに言う。

「勝負の途中で、誰も予想してなかったようなハプニングが起きるのが楽しいです! どうぶつタワーバトルで、絶対無理だと思って置いたキリンが、なぜかカメの甲羅に引っかかって、すごいタワーができたときとか! 勝ち負けより、そういうのが面白いなって!」

最後まで静かに考えていた大輝が、ぼつりと口を開いた。

「……勝負している間、他のことを全部忘れて、それだけに集中できる時間は……好き、かもしれません」

先生は優しく頷いた。

「みんなそれぞれに『楽しい』と思えるポイントがありそうやね。美緒さんも、『勝負そのもの』ではなくて『それまでの仲間との時間やプロセス』に楽しさを見出してくれたんやな」

先生が特に美緒に優しく語りかけると、美緒は少しはにかみながら、でも自分の気持ちを正確に理解してくれたことが嬉しいという表情で、こくと頷いた。

「……はい」

陽奈や海翔も、先生の言葉に「うんうん」と頷いている。クラス全体が、多様な「楽しさ」の形があることを改めて共有したような、穏やかな空気が流れる。

先生は本題に戻った。

「ほんならここで『僕』の行動について考えていこうか。『僕』の『試合を引き延ばして引き分けに持ち込む』『急にログアウトして、勝敗をつけることから逃げる』っていう行動を受けた対戦相手がみんな自身やったら、この行動に対してど

「思う？」

先生がそう問いかけると、生徒たちは、自分が対戦相手だったら……と想像し、次々と顔をしかめた。竜二が嘲笑う。

「はっ、ダッセェな。最後まで戦う根性もねえのかよって思うわ。まあ、相手がビビって逃げたってことだから、俺の勝ちでいいけどな。雑魚はそうやって逃げるしかねえんだよ」

陽奈が憤慨して言う。

「すっごくムカつきます！ こっちは本気でやってるのに、すごい失礼じゃないですか？ 最後までちゃんと勝負してほしい！ 逃げるなんて、卑怯です！」

拓也も続く。

「腹が立つというより、がっかりします。勝負の記録も残らないし、対局後の感想戦もできない。何のために時間をかけて将棋を指したのか、分からなくなります。すごく無駄な時間だったと感じてしまいます」

海翔が少し同情するように言う。

「うーん……もちろん、ええ気はせえへんな。でも、それと同時に『ああ、この人、負けるのがめっちゃ怖いんやな』って、ちょっと可哀想になるかもしれん。」

勝負を楽しむ余裕が、今はないんやろなって」

美緒が不安そうに呟く。

「え……私が何か悪いことしちゃったのかなって、不安になります……。相手が楽しくなかったのかな、とか……。勝負が終わらないのも、なんだか悲しいです……」

咲が不思議そうに首を傾げる。

『あれ？』って思います。どうぶつタワーバトルだったら、途中でいなくなっちゃったら、作りかけのタワーだけが残って『どうなっちゃうんだろう？』って。勝負より、タワーのほうに心配になります！」

大輝が静かに、しかしはつきりと言った。

「……対話が、途中で終わってしまった感じがします。相手が何を考えていたのか、最後まで分からなくなる。……それが、一番気持ち悪いです」

先生は頷き、優しく話す。

「そやんな、良い気はせんよな。みんながさっき考えてくれた『勝負の楽しさ』も途中で途絶えるもんな」

そう言うと、先生は竜二くんに視線を移す。

「そういえば竜二くん、最初『負ける勝負は時間の無駄、負けそうになったら切る』って言うてくれてたやん？ 相手の気持ちを踏まえてどう思う？ 『だっせえ』とか思われてるかも」

教室の視線が一斉に竜二に集まる。彼は一瞬、意表を突かれたような顔をしたが、すぐにいつもの不遜な表情に戻った。

「……別に。相手がどう思おうが、俺には関係ねえ。だっせえって思いたきゃ、勝手に思っとけばいい。そんなメンタル弱い奴は、どっちみち俺の相手じゃねえかな。そもそも、顔も見えねえネットの相手の気持ちとか、考えてやるだけ無駄だろ」

竜二はそう言って、挑むように先生を見返した。彼の言葉に、陽奈や美緒は少しショックを受けたように目を見開き、拓也は「それは違うだろ」と言いたげに眉をひそめている。海翔は、腕を組んで、何かを考えるように静かに竜二を見つめている。教室に、再び緊張が走った。

先生がクラス全体に問いかける。

『『ダサイ』って思うのはメンタル弱いんやろうか』

その問いに、はっきりとした意思が感じられる空気が生まれた。最初に口を開い

たのは海翔だった。

「いや、逆やないかな。ちゃんと『それはダサイ』って思えるっていうのは、自分の中にフェアプレーみたいな、しっかりした『ものさし』があるからやと思う。むしろ、そのものさしを無視して、ルールを破ってでも自分だけ勝ちたいって思うほうが、精神的には弱いんじゃないかな。負けを認められない弱さ、というか」
続いて、拓也も同意する。

「弱いとは思いません。勝負は、決められたルールの上で成り立つものです。その前提が破られたことに対して、おかしいと感じるのは、正常な感覚です。その感情がなくなったら、そもそも社会が成り立たないと思います」
陽奈も強く頷く。

「弱くないです！ 全然弱くない！ 相手が卑怯なことしたら、『なにそれ！』って思うのが普通じゃないですか？ そう思わないほうがおかしいです！」

三人の意見を聞いて、竜二が舌打ちしながら反論する。

「……いちいち相手の行動に本気でムカついて、感情的になるのが弱いって言うんだよ。本当に強い奴は、相手が逃げようが何しようが、『ふーん』で終わりだろ。気にしてる時点で、そいつと同じレベルってことだ」

美緒、大輝、咲は、発言はしないが、海翔や拓也の意見に頷いたり、竜二の反論に考え込んだりしながら、真剣な表情で議論の行方を見守っている。

先生は静かに竜二を見つめた。

「そやな。僕も、ダサいって思うことや感情的になることが悪いとは思わへん。

だって竜二くん自身もされたら『ダサい』って思うやろ？ いま竜二くんは相

手の感情を考えると自分に自身を重ね合わせてくれたはず。『見えない相手』

じゃなくて『竜二くん自身』がそれを『ダサい』って思ってるってことや」

先生の、静かで、しかし真っ直ぐな言葉が教室に響く。クラスの全員が、固唾をのんで竜二を見ていた。彼は、先生の言葉を聞くと、一瞬「は？」と何か言い返そうとして口を開きかけたが、何も出てこない。

「……っ」

反論の言葉が見つからない。先生に「お前自身が『ダサい』と思ってるのだ」

と、自分の心の内側を、鏡で見せられたように感じたのだろう。竜二は、初めて悔しそうに、そして少しバツが悪そうに、先生からふいと目をそらして、黙り込んでしまった。その様子を、海翔と拓也は「なるほどな……」というように深く頷きながら見つめ、陽奈と美緒は、驚いたように目を見開いている。大輝は、黙り込んだ

竜二の横顔を、じっと静かに見ていた。

先生はクラス全体に語りかける。

「もちろん、『他の人がどう思おうか関係ない』ってのは生きていく上でめちゃくちゃ大事なんですよ。だって、『誰かに嫌われるかもしれない』とか『どう思われちゃうんやろう』とか思いながら生きるのって、めっちゃしんどいやん？ でも『自分自身はどう思うか』ってのは別や。『他の人がどう思おうか関係ない、でも自分はこの行動をダサいと思う。ダサい行動はしたくないなあ』って行動を変えていくんや」

先生の言葉は、説教ではなく、静かな独り言のようにも、クラス全体への問いかけのようにも聞こえた。教室は、深い沈黙に包まれている。さっきまで頑なに外を向いていた竜二の視線が、自分の机の上に落ちた。彼は、握りしめた自分の拳を、ただじっと見つめている。先生の言葉が、彼の鎧の内側にある、彼自身の「ものさし」に届いたのかもしれない。

海翔と大輝は、深く頷きながら、強い尊敬の眼差しで先生を見ている。先生が言語化したかった核心を、二人は完全に理解したようだ。拓也も、それが最も合理的で、強い生き方であるとも言うように、納得の表情で聞いている。陽奈や美緒

も、ただ「人にどう思われるか」を気にするのは違う、「自分が自分をどう思うか」という新しい考え方に、真剣な表情で向き合っていた。

先生は、改めて陽奈と美緒に視線を向けて語りかける。

「竜二くんを取り上げたけど、この考え方は陽奈さんとか美緒さんにもめっちゃ刺さってくれるんじゃないかって信じてる。この考えを聞いた今だったら『負けても申し訳ないとは思わなくていい』ってのがより一層分かると思うねん。どうやらか？」

二人は、自分たちの心に直接語りかけられているその言葉を、真剣に受け止めていた。先に、陽奈が、大きく一度頷いて、顔を上げた。

「……はい！　なんだか、分かった気がします。負けて『申し訳ない』って思うのは、『チームのみんなにどう思われるかな』って、他の人の目を気にしてたからだったのかも……。でも、自分が『ダサイプレーはしてない、全力でやった』って胸を張って言えるなら、謝る必要はないんですね。『悔しい！』っていう、自分の気持ちだけでいいんだ……！」

続いて、美緒も、吹っ切れたような、穏やかな表情で言った。

「はい、すごくよく分かります。さっき、少し気持ちが楽になった理由が、はっき

りました。『他の人がどう思うか』じゃなくて、『自分は、自分のこの行動をダサイと思うか』……。そう考えたら、一生懸命やった結果、負けてしまった自分を、自分で『ダサくないよ』って認めてあげられる気がします。だから、もう『申し訳ない』って思わなくてもいいんですね」

二人の言葉に、海翔は「そうそう」とでも言うように、優しく微笑んでいる。竜二は、顔を伏せたままだが、肩の力は少し抜けているように見える。彼もまた、自分以外の生徒にかけられた先生の言葉を、自分のこととして聞いているのかもしれない。

先生は優しく頷き、続ける。

「そういうことや。ちよつとだけ脱線するけど、よく『自分がされて嫌なことはするな』ってよく言うやん？ あれって『俺は別に嫌だとは思わないから』っていう反論よく聞くんよ。さっき言うた話やと反論が正しそうやん？」

生徒たちは、なんとなく受け入れてきたその言葉の意味を真剣に考え始めた。

「でも違うよね。これはいつも僕が言うてる『みんなで気持ちよく過ごせるのが良いね』ってのを思い出してほしい。『じゃあ……、どゆこと？』ってなるやんな。僕はそのよく言われるやつを変えたこれを掲げるわ」

「……『相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな』」

先生が、ゆっくりと、しかし力強くその言葉を紡ぐと、教室は水を打ったように静かになった。生徒たちは、これまで議論してきたこと全てが、その新しい言葉の中に集約されていくのを感じていた。しばらくの沈黙の後、海翔が、深く息を吸い込んで、感嘆の声を漏らした。

「……先生、それ、すごいですね……。『自分がされて嫌なこと』じゃなくて、『相手が嫌がること』ってのが、全然違う。自分の基準じゃなくて、相手の気持ちを想像することが大事なんです。そして最後の『自分を犠牲にはするな』って言葉があるから、ただの良い人でいるんじゃないくて、お互いが本当に気持ちよくいられる、本当の意味での『思いやり』になるんじゃない……。めっちゃくちゃ、しつくりきました」

拓也も、そのルールの完成度に頷いている。

「すごく、分かりやすいです。最初のルールだと、『俺は平気だから』っていう反論ができてしまうけど、先生のルールにはそれがない。それに、『自分を犠牲にはするな』という条件が付いていることで、無理をしなくてすむ。すごく合理的

で、現実的なルールだと思います」

美緒は、特に「自分を犠牲にはするな」という言葉に、何かを気づかされたような表情で、静かに先生の言葉を噛み締めている。竜二は、腕を組んだまま、静かに目を閉じていた。

先生は一度区切りを入れた。

「おっしや、今日の授業の内容はこの辺にしとくか。みんなそれぞれに考え方の変化とか気づきとかがあったと思う。この読み物は次の授業でも使うから、次回も楽しみにしてて。」

先生が授業の終わりを告げると、生徒たちは「え、もう終わり？」というように、少し名残惜しそうな顔をした。

「じゃあ最後、授業の最初に配ってたワークシートに感想とか考えたことまとめておいて。自分の中で成長した部分があれば、自信もって僕に自慢してな。ほな書いてもらって、書いたら後ろから前に回していつてか。焦らんでいいよ。ゆっくり授業を振り返ってな」

先生の最後の言葉を聞くと、それぞれが静かに頷き、配られていたワークシートと鉛筆を手取る。教室には、自分の心の中を覗き込むような、穏やかで真剣な時

間が流れ始めた。一人、また一人と顔を上げ、書いた紙を後ろから前へと静かに回し始める。

「全員分集まったかな。ありがとう。ほんならこの感想は後でゆっくり読ませてもらうわ。ちょうど時間やな。道徳の授業終わります。ありがとうございました」先生の言葉で、張り詰めていたような、それでいて充実感のある空気がふつと和らぐ。陽奈が、前回と同じように、でも少しだけ落ち着いた声で、号令をかけた。

「起立！」

七人の生徒が、静かに、そして一斉に立ち上がる。それぞれが、この一時間で考え抜いたことの重みを感じながら、先生に深くお辞儀をした。

「ありがとうございました！」

顔を上げた生徒たちの表情は、少し疲れているようにも見えたが、その目には、難しい問題から逃げずに考え抜いた者だけが持つ、静かで強い光が宿っていた。

道徳ノート2 勝負と誇り

勝負の楽しさとは何か？

- ・試合に勝つこと
- ・立てた作戦が上手くいくこと
- ・相手との駆け引きや、試合後の健闘をたたえ合う関係
- ・仲間と一緒に練習したり励まし合ったりする過程

勝負に負けたとき、どう思うか？

- ・腹が立つ。時間の無駄だったと感じる。
 - ・悔しい。悲しい。
 - ・チームや相手に申し訳なく思う。
 - ・次に繋げるエネルギーになる。完敗はむしろスッキリする。
- 相手を尊重しない行動（時間稼ぎ、通信切断）をどう思うか？
- ・失礼。卑怯な行為だと感じる。ダサい。

- ・ 時間が無駄になり、対局から学べなくなる。
- ・ 余裕のなさを、少し可哀想に思う。
- ・ 自分が何か悪いことをしたのではないかと不安になる。
- ・ 相手との対話が途中で終わってしまったように、気持ち悪い。

この時間のまとめ

- ・ 本気で戦うからこそ、勝負は楽しい。
- ・ 他の人がどう思おうが関係ない。
- ・ 自分がどう思うかが大切である。(自分自身が誇れる生き方)
- ・ 「相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな」(相手のことを想像する。思いやりの気持ち)

内容項目

- (1) 自主、自律、自由と責任
- (9) 相互理解、寛容
- (22) よりよく生きる喜び

ワークシート1

先生は、集まった感想に目を通し、一人ひとりの心に届けるように、青ペンでコメントを書き込んでいく。

陽奈のワークシート

今日の授業で一番心に残ったのは、先生が言ってくれた「手抜きと實力不足は違う」という言葉です。負けたときに「申し訳ない」って思うのは、チームのみんなにどう思われるかを気にしていたからだって気づきました。

「私の成長（自慢！）」これからは、もし負けても、自分が全力を出し切ったって言えるなら、「ごめん」じゃなくて「悔しい！」って胸を張って言おうと思います。

先生より

ええやん！ 全力出したら胸張って「悔しい！」って言いな。そっちのほうが周りは気持ちいいと思うし、何よりも陽奈さん自身が楽しめると思うよ！

美緒のワークシート

最後の先生の言葉が、お守りみたいに聞こえました。「相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな」私は今まで、自分を犠牲にすることが優しさだと思っていたかもしれない。

「私の成長」これからは、相手も自分も気持ちよくいられる優しさを考えたいです。自分を大切にすることも、優しさの一つなんだって思えました。

先生より

そうやな。「気を遣う」と「優しさ」は別やねん。(またどこかの授業で扱う予定。ネタバレごめんね。) 気遣いは気を遣うほうも遣われるほうも疲れるの。自分を大事に優しくこう！

拓也のワークシート

主人公の行動は、当初から非合理的だと思っていました。しかし、なぜそれがダメなのかを「相手の気持ち」や「自分の基準」といった言葉で深く考えたことはありませんでした。

「僕の成長」「自分がされて嫌なことはするな」というルールが不完全であるこ

と、そして先生がくれた新しいルール（相手が嫌がることは）が、より論理的で現実的であることに気づけました。物事をより深く、多角的に見る力が少しずついたと思います。

先生より

論理的な拓也くんにも刺さったみたいで嬉しい！ 道德って模範解答のない状態で最適解を見つけるようなもの。いろんな視点から見れると判断がしやすくなるね。

海翔のワークシート

今日の授業で一番勉強になったのは、先生が竜二に話したことです。俺やったらたぶん「お前の考えは間違ってる」って真正面から否定してぶつかってたと思う。でも先生は、竜二自身の言葉を使って、本人に考えさせた。だからこそ竜二も、自分自身を見つめ直せたんやと思う。

「俺の成長（自慢）」相手を否定するんやなくて、相手の中にすでにある「ものさし」に気づかせてあげることが、本当の意味で人を変える力になるんやなくて学びました。

先生より

読み物じゃなくて授業から学んでくれたんやな！ 僕が怒るとかぶつかってのが苦手な性格なだけかもしれへんけどね。授業も人との関わりやから、気持ちよく楽しくいきたいね。

咲のワークシート

ネットの将棋の話だったけど、私はどうぶつタワーバトルのことをずっと考えていました。途中で相手がいなくなったら、作りかけのタワーが残って可哀想だなって思いました。

『私の成長』 ネットの向こうにも、私と同じようにタワーを作ってる人がいるんだって、当たり前のことだけど、初めてちゃんと想像できた気がします。これからは、相手がいることを忘れないようにしたいです。

先生より

画面の向こうにいる相手の存在、大事やね。タワーだけじゃなく、タワーの向こう側にいる人のことも想像しながらタワーをつくると、より楽しくなるかもしれないね！

竜二のワークシート

「成長した部分？」 知らねえ。けど、先生が言ってた「他の奴がどう思うかは関係ない。でも、自分自身が自分の行動をダサイと思うかは別の話」ってやつ。あれは、まあムカつくけど、違うとは言えねえなと思った。これからは、人にどう見られるかじゃなくて、俺が俺のやったことを「ダサイ」って思わねえかどうか、考えてやる。……それだけだ。

先生より

ええやん。かつこええ。めちゃくちや成長しとるよ。「相手にどう思われるか」じゃなくて「自分がどう思うか」。次回以降の授業でも竜二くんの「カッコいいとこ」見してな！

大輝のワークシート

僕が今まで、なんとなく心の中で感じていたことが、先生の言葉ではっきりと形になりました。「人と勝負するより、できなかったことができるようになることが気になる」という僕の気持ちは、「自分のものさし」を大事にしていたからだと分かりました。

「僕の成長」 先生が最後にくれた「相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな」という三つのルールは、僕がこれから生きていく上での、完璧な道しるべになると思います。ありがとうございます。

先生より

大輝くんはすでにちゃんと自分の気持ちを大切にしてたんやな。心をうまく言語化できるか分からへんけど、これからもなるべく分かりやすい言葉にしていこうと思うわ。ありがとう！

3時間目 読み物「ネット将棋」二日目

生徒たちは前回の先生の言葉を思い返し、「今日は一体どんなことをするのだろうか」と期待を膨らませていた。

「おはよう。今日もやっていこか。まずは前回のワークシート返していくわな。一緒に今日のワークシートも配るわ。自分の分とったら後ろに回して行って」

生徒たちの手元に、二枚のプリントが配られていく。

生徒たちは、自分のシートを受け取ると、少し緊張した面持ちで青文字のコメントを読み始めた。

陽奈は、先生のコメントを読むと、「はいー」と声に出して頷き、満面の笑みで背筋を伸ばした。美緒は、『気を遣う』のと『優しさ』は別……と書かれた部分を指でそっとなぞり、何か大切な言葉を受け取ったかのように、ふわりと微笑んだ。

海翔と拓也は、先生からの的確なフィードバックに、尊敬の念を込めて「なるほど」というように深く頷いている。咲は、「タワーの向こう側！」と小さくつぶやき、何やら新しい面白い遊びを思いついたかのように目を輝かせた。

そして、竜二。彼は、自分のワークシートに書かれた「かつこええ。めちゃくちゃ成長したよ」という文字を、誰にも見られないように、でも何度も読み返している。そして、ふいと顔を上げた時、その口元には、ほんの少しだけ照れくさそうな笑みが浮かんでいた。彼は、少しだけ行儀よく座り直した。

大輝は、先生からの感謝の言葉に、静かに、そして深くお辞儀をした。

クラス全体が、先生からの温かいフィードバックによって、ポジティブで集中した空気に包まれている。

「……全員行き渡ったかな」

先生は教室全体を見渡し、頷いた。

「じゃあ道德の授業始めていきます。お願いします」

「お願いします」

生徒たちの声が、昨日よりも少しだけ、はつきりと揃ったように響いた。

「よし、じゃあ前回のお話……」

先生はそう切り出すと、小声で「なんか海外ドラマみたいな言い方になってた……」と呟いた。その少しおどけたような言い方に、教室の空気が和らぐ。

『ネット将棋』を通してどんなこと考えたか覚えてる？」

生徒たちは、昨日の濃密な授業を思い出しながら、記憶をたどっていた。最初に、整理するように話し始めたのは拓也だった。

「はい。最初は『勝負は好きか』という話から始まって、負けたときの気持ちについて話し合いました。そこから、主人公の行動が相手にどう思われるか、という話になって……。最後に、先生が『自分がされて嫌なことはするな』というルールの、新しい考え方を教えてくれました」

拓也の言葉に、陽奈が付け加える。

「あと！ 先生が、『負けても申し訳ないって思わなくていい』って言ってくれたことです！ 『手抜き』と『実力不足』は違うんだって」

さらに、海翔が、昨日の議論の核心に触れた。

「竜二が『相手の気持ちは関係ない』って言ったときに、先生が『他の人がどう思うかじゃなくて、自分自身が自分の行動をどう思うかが大事だ』って話をしてくれたのが、一番印象に残ってるわ。」

その言葉に、竜二は少しだけ視線を下に向けたが、何も言わずにまた先生の方を見た。他の生徒たちも、「ああ、そんな話をしたな」というように、静かに頷いている。

「そうやったな。勝負の話から、気の持ち方、行動を起こす判断基準について考えた。なかなかハードな、重めの授業になってたな。今日は「言葉と気持ち」について考えていこうと思うで。まずは3分あげるから、お話の内容ザッと読み返してみてか。んーと、28ページな」

先生の言葉を受けて、生徒たちは一斉に教科書に視線を落とし、パラパラとページをめくる音だけが静かに響き渡る。

陽奈と美緒は、特に明子のソフトボールの場면을、感情を確かめるようにもう一度じっくりと読んでいる。拓也は、全体を素早く見返し、話の要点を再確認しているようだ。

竜二は、机に肘をつき、指で文字を追いつながら、特に主人公が敏和に馬鹿にされる場面や、敏和が負けについて語る場면을、眉間にしわを寄せて読んでいた。

「読み返して、このお話の印象どうやろうか。前とは違った感想になってるかもしれない。ちょっと聞かせてか」

2分が経ち、先生がそう問いかけると、生徒たちは手元の教科書に再び目を落とした。最初に手を挙げたのは、拓也だった。

「はい。前回は主人公の行動の『なぜ』ばかりを考えていましたが、今回は登場人物の『言葉』に注目して読みました。特に、ソフトボール部の監督が言った『心を忘れた挨拶しかできなかった自分というものを知ったことだ』という部分です。これは、ただ声を出せばいいわけじゃなく、言葉にどういう気持ちを込めるかが大事だ、という意味なんだと改めて思いました」

美緒も、静かに続ける。

「私は、敏和くんが主人公にネット将棋を勧める時の言葉が、優しいなと思いました。『時間があつたら、やってみて。いろんな道場があるから』って……。相手が恥ずかしい負け方をした後なのに、馬鹿にしないで……。こういう、相手を追い詰めない温かい言葉が、人を成長させるのかなって思いました」

海翔は、少し違う視点から言った。

「俺は今回、言葉そのものよりも、『言えない』っていう気持ちの方に目がいったわ。主人公は『投了します』って言えへんし、明子さんは『私のせいで負けました』って言えへん。本当に言いたい大事な言葉ほど、悔しさとかプライドが邪魔

して言えなくなる。その『言葉にできない気持ち』の苦しさが、この話のテーマなんかもしれへんな」

最後に、今までで一番低い、落ち着いた声で、竜二が口を開いた。

「……主人公が、通信切った後に『みんなこんなものだろ。真面目にやっていられるか』って、心の中で言い訳してるところ。……昨日の話を聞いた後だと、ここが一番ダセエと思った。結局、自分に嘘ついてるだけじゃねえか」

竜二の言葉に、教室の空気が少し変わった。陽奈や大輝、咲も、それぞれの意見に深く頷きながら、議論が昨日よりもさらに深まっているのを感じているようだ。

「みんな、僕が今日の授業のテーマとして言った『言葉と気持ち』に注目してくれる。前回の授業での成長を感じて泣きそうになったわ」

先生が、少し照れたように、でも本当に嬉しそうにそう言うのと、教室に温かい空気が流れた。名指しで「カッコいい」と言われた竜二は、顔を真っ赤にして、バツが悪そうにそっぽを向いた。

「……別に。思ったこと言っただけだ」

ぼそりと、誰に言うでもなくつぶやく。その様子を見て、海翔と陽奈は、少し意

地悪そうに、でも嬉しそうにニヤニヤしている。美緒は、先生の「泣きそうになった」という言葉に、もらい泣きしそうな優しい顔で微笑んでいた。

クラス全体が、一人の仲間の確かな成長と、それを見守る先生の温かい気持ちに包まれている。

「じゃあ、今日の本題に入っていこか。まずは「お願いします」「負けました」「ありがとうございました」に込める気持ち。みんなやとどんな気持ちでこの言葉を言う？」

最初に口を開いたのは、物事を整理するのが得意な拓也だった。

「僕は、全部『勝負のルールの一部』だと捉えています。『お願いします』は試合開始の合図で、『負けました』は終了の合図。『ありがとうございました』は、相手と試合全体への礼儀、みたいな。気持ちというより、それぞれの手順に必要な『合言葉』という感じです」

その意見に、陽奈が自分の気持ちを重ねる。

「私は、もっと気持ちがかもってるかな！『お願いします』は、『正々堂々、がんばろうね！』っていう気持ちで、『ありがとうございました』は、『本気で戦ってくれてありがとう！』っていう感謝です！……『負けました』は……やっぱり

り、一番悔しい言葉ですけど……」

海翔は、さらにその奥にある意味を語る。

『全部、相手への敬意の表れかなって思うわ。『お願いします』は『あなたの時間を借りて、真剣勝負を挑みます』っていう敬意。『負けました』は『あなたの勝ちです』っていう、相手の実力への敬意。で、『ありがとうございました』は『あなたと勝負できて良かった、成長できた』っていう、相手の存在そのものへの感謝やな』

三人の意見を聞いていた竜二が、それら全てを嘲笑うかのように言った。

「はっ。ただの挨拶だろ。気持ちなんかねえよ。『お願いします』って言いながら、どうやって相手を叩き潰すか考えてるし、『ありがとうございました』なんて、勝った方は気分いいから言えるけど、負けた方が言うのはただの負け犬のセリフだろ。俺は言わねえ。『負けました』もな」

美緒、大輝、咲は、発言はしないが、特に海翔と竜二の正反対の意見に、驚いたり、考え込んだりしている。

「なるほどな。どれもよく分かるわ。形式として言ってるかもしれへんし、相手に対しての気持ちがあるかもしれへん。そうやなあ……咲さんとかどう思う？ 挨

撈に何か気持ち込めてたりする？」

先生が咲に優しく問いかけると、咲は少し考えてから、ぱっと顔を輝かせた。

「はい！えっと、どうぶつタワーバトルだと、『お願いします』って文字のスタンプもあるんですけど、私はいつも一番かわいいカピバラがお辞儀してるスタンプを送ります！ それを見ると、なんか和むからです。だから、気持ちは……『これから、一緒に面白いタワーを作って、楽しく遊びましょうね！』っていう感じですよ！ 相手と戦うっていうより、一緒に遊ぶ仲間っていう気持ちのほうが強いんです！」

咲の答えに、教室の空気がまた少し変わった。美緒と陽奈は、「かわいい……」とても言うように、ふふっと微笑んでいる。海翔も、その考え方は面白いな、というように感心した顔だ。

一方、竜二は、咲の「一緒に遊ぶ仲間」という言葉を聞いて、「はあ？」と、心底呆れたように小さく息を漏らした。

「気持ちが和むのか！ 良いね。『対戦相手は仲間』って考え方か。じゃあ逆に、みんなは「お願いします」「負けました」「ありがとうございました」を言われたらどう感じる？」

先生が問いの視点をひっくり返すと、生徒たちは「言われる側」の気持ちを想像し始めた。

『お願いします』って言われたら、『よし、やるぞ！』って気合が入ります！

『ありがとうございます』って言われると、『こちらこそ！ 良い試合だったね！』って嬉しくなります！」

陽奈が言う。美緒は、

「ちゃんと挨拶してもらえると、すごくホッとします……。『ああ、この人は怖い人じゃないんだな、一緒に楽しく勝負できるんだな』って安心できるので……。

『ありがとうございます』って言われると、こっちも『ありがとう』って、温かい気持ちになります。」

と話す。海翔が続けた。

「相手からちゃんと言われたら、一人の人間として、対戦相手として、尊重されるんやなって感じるな。『負けました』って言われたときは、相手がこっちの力を認めてくれた証拠やから、こっちも『いや、いい勝負やったで』って相手の健闘を讃えたい気持ちになる」

「勝負がルール通りに正しく開始されて、正しく終了したんだな、と確認できて

スッキリします。特に、負けた相手がちゃんと『負けました』と言ってくれると、後腐れなく次の対戦に移れるので、合理的だと思います」と拓也は分析する。竜二は吐き捨てるように言った。

「何も感じねえよ。言うのが当たり前なんだから。『お願いします』？ どうせ勝つのは俺だし。『負けました』？ そりゃそうだろ、お前は弱いんだから。ただの事実確認だ」

咲は楽しそうに話す。

「カピバラのスタンプが返ってきたら、『あ、この人もかわいいのが好きなんだな！』って嬉しくなります！ 『仲間が見つかった！』って感じですよ！ 『ありがとう』って言いました』って言われたら、『また遊ぼうね！』って思います！」

最後に、大輝が静かに言った。

「……その言葉で、相手と繋がってる感じがします。同じ時間を、同じ気持ちで過ごしてるんだなって……。『負けました』って言われるのは、対話の終わりを、相手がちゃんと告げてくれたっていう感じがして、大事なことだと思います」

「みんないろんな考えが出たけど、全部ええ意見ばっかやな。バラバラに見える意見やけど、凝縮すると……」

『挨拶もコミュニケーション』

「ってことや。言われた側に感じるものがある。「何も感じひん」って言うてくれた竜二くんも「どうせ俺が勝つねん」とか「そりゃそうや」とか感じてやる？」

こういうふうには、相手の心に動きをもたらすのが挨拶なんや」

先生が、バラバラに見えた生徒たちの意見を「コミュニケーション」という一つの言葉でまとめると、教室に「ああ、なるほど」という納得の空気が満ちた。

特に、自分を例に出された竜二は、ぐっと言葉に詰まった。先生が、自分の「何も感じない」という強がりの中から、「どうせ俺が勝つ」という心の動きを的確に見抜いたことに、驚きと、ほんの少しの感心が入り混じったような、複雑な表情をしている。

海翔が、膝を打って言った。

「なるほどな……『コミュニケーション』か。確かに、俺らが言ってた『敬意』も、陽奈の『気合』も、さきの『遊びたい』も、全部相手に何かを伝えようとしてるもんや。竜二の『相手は格下』っていう確認ですら、コミュニケーションの一種なんやな。すごい、全部繋がったわ」

その言葉に、拓也や大輝も深く頷いている。陽奈や美緒も、ただの挨拶だと思っ

ていた言葉の、その奥にある意味に気づき、目を輝かせている。

「これ聞いたうえで、先生の毎回の授業を思い出してほしいんやけどどう？ 何か

気付く？」

先生のその問いに、生徒たちは一瞬きよんとした後、はっと何かに気づいたように、次々と顔を見合わせた。最初に、その気づきを言葉にしたのは海翔だった。

「…あ！なるほど……。先生が、毎回答授業の最初に『お願いします』って言って、最後に『ありがとうございます』って言うってくれる……。あれも、ただの号令やなくて、俺らに対するコミュニケーションやったんやな。『今から君たちの本気の意見を聞く準備ができてますよ』っていう始まりの合図と、『君たちが頭を使って考えてくれたことに感謝します』っていう、ちゃんとした終わりの合図。だから俺ら、安心して本音で話せてたんや」

海翔の言葉に、美緒が強く頷く。

「はい……。先生が最初に『お願いします』って言うのと、私も『よし、ちゃんと考えよう』っていう気持ちになります。で、最後に『ありがとうございます』って言われると、一生懸命考えてよかったなって、すごく温かい気持ちになります。先生が言葉で、授業の空気を作ってくれてたんだなって、今、思いました」

竜二は、何も言わない。言わないが、これまでで一番、何かを深く考え込んでいるような顔で、先生と、クラスの仲間たちを交互に見ている。自分が「意味がない」と切り捨てた「挨拶」を、この先生が、そしてこのクラスが、どれだけ大切にしているかを、今、肌で感じているのかもしれない。

「うんうん。僕の授業は毎回『お願いします』から始まって『ありがとうございまして』で終わってるはずなんや。ここには実は気持ちを込めていて、『一緒に授業創り上げていこうね。いろんな意見を聴かせてね。ここから50分間お願いします。』って気持ちと、『お疲れさま。いろんな意見が聞けて嬉しかったよ。良い授業と一緒に作ってくれてありがとうございました。』って気持ち。別にみんな挨拶に気持ちを込めろ、とは言わない。でも、これを言われたら気持ちが切り替わるとかみんなの心の中で何かしら変化すると思うねんな」

先生が、普段の挨拶に込めている、本当の気持ちを打ち明けてくれる。生徒たちは、ただ黙って、その言葉を一言一句聞き漏らさないように、じっと先生を見つめている。

海翔が、クラスを代表するように、深く頷いた。

「……だから、先生の授業は、始まる時に『よし、やるぞ』って思えるし、終わった

後に『ああ、頭使ったな』って充実感があるんですね。言葉だけじゃなくて、先生の気持ちも、ちゃんと俺らに届いてました」

美緒は、少し目を潤ませながら、とても嬉しそうに微笑んでいる。竜二は、顔を上げて先生のことを見ていたが、再びゆっくりと視線を落とし、何かを考え続けている。教室全体が、これまで以上に温かく、そして強い信頼感で結ばれたような空気に満たされた。

「じゃあ、30ページの真ん中らへん。明子さんが監督に言われたセリフ。『目の前の相手にお礼を言うことすらできないようでは、決して強くはなれないぞ』これってどういうことやと思う？ 納得できる？」

最初に、陽奈が、少し悩みながらも手を挙げた。

「最初は、明子さんが可哀想だっと思っていました。負けてめっちゃ悔しいのに、『ありがとうなんて言えるわけじゃないじゃん！』って……。でも、前回の話を聞いてからだと、悔しい気持ちに自分の心に乗っ取られないで、ちゃんと相手への敬意を伝えられるのが『心の強さ』なのかなって……。だから、今は納得できます。でも、すごく難しいことだと思います！」

すると、待ってましたとばかりに竜二が反論する。

「はっ、意味わかんねえ。負けた奴が『ありがとうございました』なんて言ったら、ただの負け犬の遠吠えだろ。強さってのは、勝つことだろうが。負けた相手にヘコヘコ頭下げて、それで強くなれるなら誰も苦労しねえよ。納得できるわけねえ」

その竜二の意見に、今度は海翔が静かに返す。

「俺はめっちゃ納得できるわ。勝負の結果だけに心を囚われて、相手への敬意とか、試合ができたことへの感謝を忘れてしまうのは、心がまだ未熟やからやと思う。自分の負けをちゃんと受け入れて、相手を讃えられる。その心の余裕こそが、次の勝ちに繋がる本当の『強さ』なんやないかな」

最後に、拓也が論理的にまとめた。

「僕も納得できます。感情的に『悔しい』で終わらずに、『ありがとうございました』と口に出して言うことで、強制的に試合を終わらせて、次のステップに進むための区切りになるんだと思います。そこで気持ちを切り替えられないと、反省も分析も始まらない。結果的に、強くはなれない。合理的な考え方です」

他の生徒たちも、真剣な表情で議論を聞いている。「心の強さ」と捉える生徒たちと、「負け犬のセリフ」と切り捨てて竜二。監督の言葉一つを巡って、クラスの

意見は真っ二つに割れた。

「なるほどな。『気持ちを切り替えるスイッチ』みたいなもんか。『心の強さ』ね。でも、負けた相手に頭下げてても勝てやんもん……。じゃあ、『強さ』ってなんやろうか。みんなはどう思う？ 勝負に限らんでいいよ」

先生が、勝負から離れて「強さとは何か」という、より本質的な問いを投げかけると、教室は深い思索の空気に包まれた。最初に、自信に満ちた声で答えたのは竜二だった。

「決まってるんだろ。誰にも負けねえことだよ。金でも、腕力でも、なんでもいい。誰にも文句言わせねえで、自分の思い通りにできる。他人に頼ったり、ましてや頭を下げたりする奴は、全員、弱い」

その意見に、真っ向から反対するように陽奈が言った。

「私は、諦めないことだと思います！ 試合に負けても、失敗しても、『次は絶対やるぞ！』って、また立ち上がれる心が『強さ』だと思います！」

大輝が、静かに、しかしはつきりと自分の考えを述べた。

「……自分の弱さを、ちゃんと知ってることだと思います。弱い自分を知ってるから、それに流されないようにできる。それが、本当の『強さ』なんじゃないかと

思います」

海翔は、少し悩みながらも、自分の言葉を探すように言った。

「難しいな……。俺は、誰かを許せることちゃんかなくて思う。相手の失敗も、自分の負けも、受け入れて次に進めること。自分の正しさだけにこだわらへん、心の広さみたいなもんが『強さ』やと思うわ」

拓也は、分析するように言った。

「感情に流されずに、自分の目標を達成するために、やるべきことを冷静にやり続けられる能力、だと思います。たとえば悔しくても、その感情を次の計画の材料にできることが『強さ』です」

美緒は、おずおずと、でも芯のある声で言った。

「……誰かに、優しくできることだと思います。自分がつらい時でも、困っている人に手を差し伸べられるような……。そういうのが、本当は一番『強い』んじゃないかなって……」

咲は、にこにこしながら言った。

「うーん……。どんな時でも、自分が『楽しい！』って思えることを見つけれられるのが、強いってことだと思います！ 負けても、『タワーが芸術的だったからい

いや!』みたいに見えることになって!」

『力』ってキーワード出てきたな。『力を持ってる』と『強い』って同じ意味やろか? みんなはどう思う?」

先生が新しい問いを投げかけると、クラスは一瞬「え、同じじゃないの?」という空気になったが、すぐに生徒たちはその言葉の奥にある深い意味を探り始めた。竜二が、当然だという顔で即答する。

「は? 同じだろ。力があんだから強い、強いから力があんだよ。ごちゃごちゃ言葉遊びしてんじゃないよ。結局、最後に立ってる奴が強えんだ」

その意見に、海翔が静かに、しかしはつきりと反論した。

「全然違うと思うわ。『力を持ってる』っていうのは、ただの状態でしかない。すごいエンジンを積んだ車みたいなもんや。でも『強い』っていうのは、その力をどう使うか、その使い方を知ってるってことやと思う。いくら力があっても、それを振り回すだけなら、それはただの暴走や。本当の『強さ』は、その力をコントロールできる心の方にあるんじゃないかな」

拓也も、その意見に続く。

「僕も違うと思います。『力』は、持っているだけでは意味がない資産のようなもの

です。『強さ』とは、その持っている『力』を、目的を達成するために適切に、効果的に使える能力のことだと思っています」

美緒は、自分の考えを述べる。

「違うと思います……。力は、人を傷つけるためにも使えるけど……。本当の強さは、優しさのために使うものだと思います。自分の力を、誰かを守るために使える人が、強い人なんだと思います」

最後に、大輝が、ぽつりとつぶやいた。

「……力を持っても、自分の弱さを知らなければ、その力に自分が振り回されると思います。……だから、『強い』人っていうのは、力を持っても、それを使わないでいられる人のことかもしれない」

陽奈と咲も、海翔たちの意見に深く頷き、竜二の答えとの違いに驚いている。

「お、みんなええやん。同じに見えるかもしれないけど、まあ、僕がわざわざ問いかけるってことは『違うと考えてる』ってことやな。言うてくれた中に近い意見がいっぱい出てたんやけど、僕は『力を正しく使えること』が強さやと思うわ。

海翔くんが言うてくれたかな? 『コントロールすること』こそが強さ」

先生が、海翔の意見を優しく拾い上げながら自身の考えを述べると、教室の生徒

たちは、これまでのもやもやが晴れていくような、スッキリとした表情で深く頷いた。

名指しされた海翔は、照れくさそうに頭をかきながらも、嬉しそうに言った。

「……はい。ありがとうございます。先生の『正しく使えること』っていう言葉を聞いて、俺も、もっと考えがはっきりしました」

その一方で、竜二は、自分の意見が完全に否定された形になったが、反発する様子はない。ただ、静かに自分の席で、何かを必死に考えているように、唇を固く結んでいる。「力」とは何か、「強さ」とは何か。彼の頭の中で、新しい価値観が生まれようとしているのかもしれない。

他の生徒たちも、それぞれが口にした「優しさ」「諦めない心」「目標達成能力」といった様々な「強さ」が、全て先生の言う「力を正しく使うこと」に繋がるのだと、納得した様子だった。

「力にもいろいろある。もちろん実力で『勝つ』ってのも強さや。でも『勝つ』のが強いわけじゃない。『勝てるように力を出せた』のが強いんや。だから逆に、負けたとしても、勝つという目標のために『最善の力の使い方』をできたんなら強いのだよ」

その言葉を聞いた瞬間、陽奈と美緒は、息をのんだ。二人の目から、まるで肩の荷が下りたかのように、力がふっと抜けていく。負けることへの恐怖や、申し訳なさから解放されたような、晴れやかな表情で顔を見合わせた。

海翔は、隣で小さく「……すげえな」と呟き、心からの尊敬を込めて先生を見つめている。拓也と大輝も、これ以上ないほど完璧な定義を聞いたというように、深く、ゆっくりと頷いた。大輝の口元には、珍しく、かすかな笑みさえ浮かんでいる。

そして、竜二は、全ての鎧を剥がされたように、ただ呆然と先生を見ていた。

「勝つか負けるか」それだけだった彼の世界に、全く新しい価値基準が示された。

その目は、もはや反抗的ではなく、未知の考えに初めて触れた、ただの少年の目になっていた。

「どうやらか、みんな。『今なら分かる気がする……』？」

先生が、物語の中の明子のセリフを引用すると、生徒たちは、この二日間の授業で自分たちがたどってきた心の道のりを、その一言に重ね合わせるように、深く頷いた。陽奈が、はい！と手を挙げる。

「すぐく分かります！明子さんは、ただ負けて悔しいだけじゃなくて、監督が言っていた『心を忘れた挨拶』をしちゃった自分に気づいたんだなって……。先生が教

えてくれたみたいに、『ありがとうございました』ってちゃんと伝えるのが『強さ』なんだって、その意味が、今なら分かるってことだと思います！」

海翔も、力強く頷いた。

「俺も分かる気がするわ。明子さんは、敏和の話を聞いて、『負け』がただの終わりやなくて、次に強くなるための『始まり』なんやなって気づいたんやと思う。だから、自分の失敗をちゃんと受け止めて、次に進めるって思えたんやないかな」そして、これまでで一番静かな、しかし一番はっきりとした声で、竜二が、誰に言うでもなく呟いた。

「……まあな。自分の負けを人のせいや運のせいにして喚いてるだけじゃ、ダメセエってことだろ。……それを、分かったってことじゃねえの」

竜二のその言葉に、クラスの全員が息をのんだ。他の生徒たちも、もはや何も言うことはない、というように、静かに、そして深く頷いている。物語の中の明子の気づきは、今、教室にいる全員の気づきとなっていた。

「みんなそれぞれに言葉を受け取ってくれたな。自分の負けを認めることも強さや。負けを認めるからこそ『ありがとうございました』が言える。ほんで、心の底からの『ありがとうございました』が次へのステップになるんや」

一つ一つの言葉が、生徒たちの心に深く、深く刻み込まれていくようだった。七人の生徒たちは、誰一人、声を発しない。ただ、まっすぐに先生を見つめている。

悔しさを乗り越えようとする陽奈の目。優しさの意味を考え続ける美緒の目。物事の本質を探究する拓也と大輝の目。仲間を思う海翔の目。遊びの中に真理を見つけた咲の目。そして、うつむくのをやめ、先生をじっと見つめ返す、竜二の目。

その全員の眼差しが、「ありがとうございます」という言葉の、本当の重みと温かさを、今、確かに理解していた。

「じゃあ、31ページの一冊最後。『敏和のツッコミに明子と智子は笑ったが、僕は笑えなかった』ってあるけど、なんでやるか？」

先生の問いに、生徒たちは物語の最後の場面、主人公の心の中に意識を集中させた。拓也が、まず状況を整理するように言った。

「敏和くんや明子さんが話している『負けを認める強さ』を、主人公自身が、将棋の対局でもネット将棋でも、全くてきていなかったからです。二人の会話が、全部自分のダメだった行動に突き刺さってきて、笑える状況じゃなかったんだと思います」

陽奈は、その気持ちに共感する。

「罪悪感だと思えます！敏和くんたちはすごくレベルの高い話をしてるのに、自分は時間稼ぎしたり、通信切ったりっていう、ひきょうなことばかりしてたから……。みんなが眩しく見えて、自分だけが仲間外れみたいな気持ちになったんじゃないかな」

海翔が、それを「鏡」という言葉で表現した。

「敏和と明子さんの会話は、主人公にとって『鏡』みたいなもんやったんやろな。その鏡に、自分の『ダサイ』姿がはっきり映ってしまった。自分の弱さとか、ずるさと初めて本気で向き合った瞬間やったから、笑うなんて到底できなかったんやと思う」

最後に、竜二が、目を伏せたまま、絞り出すように言った。

「……あいつらみたいに、『深いこと』を言い合える輪の中に、自分はいれねえって思ったからだろ。自分だけが、まだ言い訳して逃げてる、一番ガキだってことに気づいたんだよ。……そんな時、笑える奴はいねえ」

竜二のその言葉に、クラスの誰もが、主人公の最後の気持ちを、そして竜二自身の心の変化を、はっきりと理解した。美緒や大輝も、深く、静かに頷いている。

「このときの『僕』、いろんなことを考えてそうやな。全部正解やと思う。でも、一個

思うんやけど、『僕』十分すごない？ このちょっとした会話でそこまで考えて自分の行動を見返せる。立派すぎると思うんやけど」

先生の言葉に、生徒たちはハツとした。今まで主人公の「ダメな部分」ばかりを見ていたが、先生は、その心の「動き」そのものに光を当てた。

海翔が、感心しきったように息を漏らした。

「……ほんまや。俺らはいいつのこと『ダサイ』とか言うてたけど、自分のダメなところと向き合うつて、一番しんどいことやもんな。それを、この瞬間にちゃんとできてる。……確かに、すごいことかもしれん」

陽奈や美緒も、「そっか……」と、主人公を見る目が優しくなっている。

そして竜二は、ずっと伏せていた顔を、ゆっくりと上げた。その目には、もう怒りや苛立ちはない。ただ、自分と同じように、痛みの中で何かを見つけようとしている物語の主人公と、それを「立派だ」と言ってくれた先生のことを見つめていた。「ほなら、最後のテーマや。28ページで敏和は『僕』によって引き分けに持ち込まれても嫌そうな顔をしなかったよな。なんでやろう？」

先生がその最後の問いを投げかけると、生徒たちは「確かに……」という顔で、物語の最初の場面を思い返していた。最初に、海翔が、少し考えながら口を開

いた。

「ほんまやな……。俺やったら、絶対『は？　ふざけんなよ』ってなるわ。うーん……。多分、敏和はもう、勝負の勝ち負けだけを見てへんかったんやないかな。主人公が時間稼ぎを始めた時点で、『ああ、こいつはまだ、負けを認められへんのやな』って、相手の心の弱さを見抜いてた。だから、もう勝負の結果はどうでもよくなって、嫌な顔もせんかったんちゃうかな」

拓也も、その意見に同意する。

「僕もそう思います。将棋は論理のゲームなので、盤面を見れば、勝敗は明らかでした。敏和からすれば、自分が勝っていることは確定していた。だから、主人公が『引き分けにしよう』と言ったのは、ただの負け惜しみにしか聞こえなかった。事実上の勝利は変わらないので、感情的になる必要がなかったんだと思います」

すると、美緒が、少し違う、優しい視点から言った。

「もしかしたら……。ただ、優しかったのかもしれないです……。主人公が、すごく悔しがつて、負けを認めたくないっていう気持ちで、敏和くんには分かったから……。ここで『僕の勝ちだ』って言ったら、主人公がもっと傷つくと思って、黙って駒を片付けたのになって……」

最後に、竜二が、ぽつりと、しかし核心を突くように呟いた。

「……自分も、昔はあんなんだったからじゃねえの。ネット将棋始めたばっかの頃は、負けるのが怖くて、同じようなことしてたのかもしれない。だから、今の主人公の気持ちさが、痛いほど分かった。……だから、何も言えなかったんだろ」

竜二のその言葉に、教室は静まり返った。誰もが、その可能性を考えてもみなかったからだ。もしかしたら敏和も、最初から強かったわけではなかったのかもしれない。その深い洞察に、生徒たちはただ、静かに頷いていた。

「竜二くんのその視点は全くなかったわ。言われてみたらその可能性もあるな！

僕的には、敏和くんはただ対局を楽しんでいて、時間稼ぎやと分かりつつも、盤面が優勢になっていくのが楽しかった。だから勝負がついてなくても満足だったのかなって」

先生の言葉に、咲が「あ！」と声を上げた。

「それ、どうぶつタワーバトルとちょっと似てるかも！ 勝敗が決まらなくても、すごい芸術的なタワーが作れてる途中だったら、それだけで楽しいです！ 敏和くんも、すごいカッコいい将棋の形が作れて満足だったのかな！」

咲の言葉に、クラス全体が「ああ、なるほど」という空気に包まれる。生徒たち

は、竜二が出した「相手の過去を想像する」という深い共感の視点と、先生が提示した「勝負のプロセスそのものを楽しむ」という純粋な視点、その両方の可能性を味わっている。

「おっしや。今日の授業の内容はこの辺にしとくか。今日もいろんな考えが出てきて、想像以上に濃い授業になったな。ほんで、竜二くんが最後にくれた視点。相手のことを想像しろってのは僕もよく言うけど、『過去』までは見れてなかったかもしれない。めっちゃくちゃ良い考えを発表してくれてありがとうな」

先生に名指しで意見を褒められた竜二は、少し照れ臭そうに、でも誇らしげに先生を見つめる。

「ほんなら最後、授業の最初に配ってたワークシートに感想とか考えたことまとめておいて。自分の中で成長した部分があれば、自信もって僕に自慢してな。ほな書いてもらって、書いたら後ろから前に回していつてか。焦らんでいいよ。ゆっくり授業を振り返ってな」

生徒たちは、この濃密な時間が終わることを惜しむように、そして、自分の中に生まれた新しい考えを確かめるように、静かにワークシートに向かった。

教室には、心地よい鉛筆の音だけが響いている。

やがて、全員が書き終え、集められたワークシートが、先生の元へ届けられた。

「起立！」

海翔の号令で生徒たちは一斉に立ち上がる。

「ありがとうございました！」

深く、長いお辞儀。顔を上げた七人の表情は、前回とは比べ物にならないほど、豊かで、強く、そして優しかった。

先生は一瞬目を丸くし、そして嬉しそうに言った。

「おお！ 今日みんなから率先して挨拶してくれたんやな。ほなら終わります。ありがとうございました」

道徳ノート3 言葉と気持ち

挨拶されるとどう感じるか？

- ・ 気合が入る。嬉しくなる。
- ・ 安心できる。温かい気持ちになる。
- ・ 一人の人間として尊重されている。相手の健闘を讃えたくなる。
- ・ スッキリする。後腐れなく次の対戦に移れる。
- ・ 「仲間が見つかった」「またよろしくね」
- ・ 相手と繋がっている感じがする。
- ・ 当たり前。事実確認。

「強さ」とは何か？

- ・ 誰にも負けないこと
- ・ 諦めないこと
- ・ 自分の弱さを知っていること

- ・誰かを許せること
- ・冷静に目標を達成し続けられること
- ・優しくできること
- ・いつでも楽しめること

この時間のまとめ

- ・挨拶はコミュニケーション
- ・力を正しく使うことこそが強さ
- ・相手の過去をも想像すること

内容項目

- (4) 希望と勇気、克己と強い意志
- (3) 向上心、個性の伸長
- (7) 礼儀
- (22) よりよく生きる喜び

ワークシート2

陽奈のワークシート

監督の「強くはなれないぞ」の意味が、やっと分かりました。悔しい気持ちに負けないで、相手にちゃんと「ありがとう」って言えるのが強さなんですな。「私の成長（自慢！）」次の試合、もし負けても、ちゃんと相手の目を見て「ありがとうございました！」って言えると思います。悔し涙と一緒に、ちゃんと言えるようになりたいです！

先生より

うん！ きっと相手だけじゃなく、陽奈さん自身も気持ちよく終われると思う。挨拶でどんどん心の輪を広げていこう！

美緒のワークシート

私は、勝負も、強い言葉も苦手でした。でも先生やみんなの話を聞いて、本当の強さは、優しさや自分を大切にすることの中にもあるんだと分かりました。

「私の成長」「強さ」という言葉が、怖くなくなりました。私にも、私なりの強さがあるのかもしれないって、初めて思えました。

先生より

そうや。絶対に美緒さんの中にも強さはある。きっとそれは美緒さんの今まで想像していたような強さではなくて、もっと優しくて柔らかい強さだと思う！

拓也のワークシート

「力を持つこと」と「強いこと」の違いを、論理的に理解できたのが一番の収穫です。強さとは、力の適切な「使い方」である、という結論に納得しました。

「僕の成長」スポーツマンシップや挨拶の必要性を、感情論ではなく、「合理的で、成長に必要なシステムだから」と、自分の言葉で説明できるようになりました。

先生より

「力」と「強さ」って似て非なるものだったよね。一見すると論理全然関係なさそうなのに。挨拶やスポーツマンシップも軸は感情論なんだけど、その感情論と論理の組み合わせが人の心を揺さぶるのかもしれないね。

海翔のワークシート

今日の授業の最後、竜二が言った「相手も昔はそうやったんかも」っていう視点には、正直、頭を殴られたような衝撃があったわ。俺は、目の前の相手のことしか考えてなかった。

「俺の成長（自慢）」クラスの仲間から、「本当の想像力」とは何かを教えてもらった。これは、この授業で一番の宝物や。

先生より

最高やん！ 身近な仲間からの学び。竜二くんの意見には僕も衝撃受けたわ。これからも、いろんな角度から「想像」していこな！

咲のワークシート

先生が、「楽しむのが強さ」って意見を認めてくれたのが、嬉しかったです！「私の成長」私の考え方は、ただの「ズレてる」だけじゃないのかもって、ちょっとだけ自信が持てました。ネットの相手にも、この「楽しい」気持ちが伝わるように、これからはカピバラのスタンプだけじゃなくて、「ありがとう」のスタンプも押そうと思います！

先生より

うん！ 強さにはいろいろあって、もちろん楽しむことも強さなんやな。咲さんの持つ強さも大事にしよう！

竜二のワークシート

「成長した部分？」最後のやつ。敏和がなんでムカつかなかったのか考えた時、「あいつも昔は主人公みたいにダサかったんかも」って思ったこと。先生がそれを「めっちゃくちゃ良い視点」って言った。人の過去を想像するなんて、考えたこともなかった。そういう考え方は、まあ、悪くねえのかもな。

先生より

あの視点は、まじで感動した。竜二さんにしかない視点、それを思いつく想像力。竜二さんの持つ強さの一つやな。人だけでなく、その過去にも目を向ける。僕の成長にも繋がったわ。ありがとうな！

大輝のワークシート

「自分の弱さを知ることが強さ」だと、僕は思っていました。でも、それだけじゃなかった。海翔くんの「許す強さ」、美緒さんの「優しくする強さ」、そし

て竜二くんの「相手の過去を想像する力」。全部が繋がっているんだと分かりました。

「僕の成長」一人で考えているだけじゃ、たどり着けない答えがたくさんあると知りました。みんなと話すことで、自分の考えも、もっと強くなるんだと感じました。

先生より

そうやな。新しい考えに触れることで、自分の考えをアップデートできる。
良い意見をどんどん取り入れて、大輝くん自身の考えをどんどん強化していこう！

授業後の先生の日記

竜二くんがめっちゃくちゃ良い意見を発表してくれて、どちゃくそに感動した。

「相手の過去を想像する」

その人が乗り越えてきた痛みを想像することもあるんだ。生徒たちにも一人過去がある。その過去すらも尊重していきたい。自分の道徳観もアップデートしていこ。

休み時間 1 とある日の朝

休み時間、廊下は生徒たちの賑やかな声で満ちている。その喧騒の中、先生は向こうから歩いてくる陽奈たちに気づいた。

「あ、先生！ おはようございます！」

「先生、おはようございます。昨日はめっちゃ頭使いましたわ」

陽奈と海翔が、元気よく声をかけてくる。隣で美緒がぺこりと小さくお辞儀をした。

「おはよう。いやあ、みんないっぱい考えてくれて嬉しかったわ」

先生はとても嬉しそうに話す。

その少し離れた場所を、竜二が通り過ぎようとしていた。彼は一瞬ためらった後、目をそらしながら、でもはつきりと聞こえる声で言った。

「……おはようございます」

「はい、おはよう！ ほんま竜二くんは……、もう……」

海翔と陽奈は竜二の挨拶に少し驚きつつも、嬉しそうにぼそっと呟く先生を見て

温かい気持ちになった。

竜二の後ろ姿を見ながら少しの余韻に浸った後、先生は三人の方に向き直した。

「ほなら三人とも、この後の授業も頑張ってな！」

「はい！」

陽奈たちは強く頷き、やる気に満ちた顔で教室に戻っていった。

髓―理のない理性―

令和7年9月18日 第一版発行

著作者 ただの洋楽好き
発行者 しがない塾講師

著作権法上の例外を除き、本書のいかなる部分も、電子的または機械的な方法を問わず、無断で複製、転載、または情報の検索システムに保存することを禁じます。

Copyright © 2025 by Kunitiko Bessho. All Rights Reserved.